

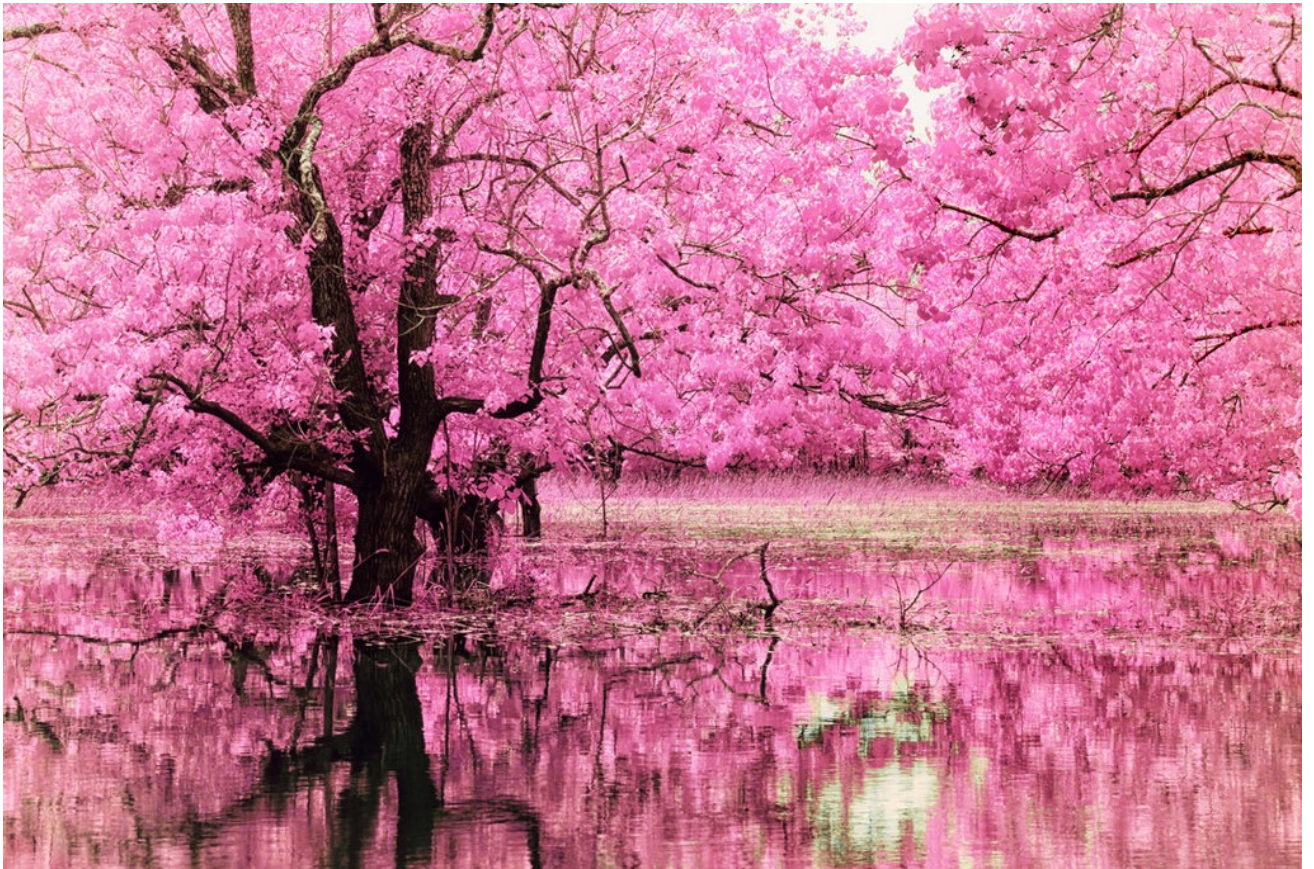
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 8

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 141. オットー・ラスキーが提唱する測定手法に対する批判的意見
- 142. 形式論理思考の盲信とホリスティック思考への飢え
- 143. 相対主義的思考を超えて
- 144. 発達段階3(慣習的段階)から発達段階4(自律的段階)への移行支援について
- 145. アイダ・ロルフの名言: ボディワークと意識の成長理論に通底する考え
- 146. ニューヨーク在住時代の恩人「井筒俊彦」先生
- 147. 意識の成長・発達に必要なもの: ジョージ・オーウェルの言葉より
- 148. ロバート・キーガンの業績とマイケル・バサチーズの業績の統合
- 149. 高度な認知レベルの体現者＝無駄のない思考運動の体得者
- 150. 「真実構築活動」と「意味構築活動」を架橋する能力
- 151. クラニオセイクラル・セラピーを体験して: 脳の成長と意識の発達の相関関係
- 152. 人財育成に蔓延する歪な「平等主義」: 生得説の欠落
- 153. 社会的・感情的発達と認知的発達の関係性
- 154. 内的宇宙と物理宇宙の共通事項: 認知レベルと次元について
- 155. 認知レベルと情報量の関係
- 156. 認知レベルの発達とOSの進化
- 157. ダイナミック・スキル理論をもとにしたLASとはどんな発達測定手法なのか?
- 158. 発達理論の歴史と最新の発達測定手法LASについて
- 159. 成人以降の知性発達理論をより深く理解するために: インテグラル理論と方法論的多元主義について
- 160. 意識の特性と「サイコグラフ(psychograph)」について

---

## 141. オットー・ラスキーが提唱する測定手法に対する批判的意見

私がオットー・ラスキー博士の下で受けた発達測定トレーニングの中で、最も時間を要したのが弁証法思考に関する学習です。トレーニングの中で、ソクラテス、アリストテレス、ヘーゲル、サルトル、ロイ・バスカー、ハンナ・アレントなどの哲学思想を学ぶことが要求されており、さらにマイケル・バサチーズ、マイケル・コモンズ、エリオット・ジャックス、カレン・キッチナーなどの意識段階モデルを理解することも要求されていました。

このように様々な哲学思想や意識段階モデルを学習することによって、私自身の探求の幅が広がったのは間違いありません。実際に、ラスキーから授かったトレーニングのおかげで、これまで自分が活用していなかった思考形態を認識することができたり、新たな思考形態の獲得につながったことは確かでしょう。

また、人間の思考形態の発達が持つ奥深さに触れ、この探求は完結することのない終わりなき旅路のような、ある種の畏怖の念に打たれたのもラスキーのトレーニングのおかげです。しかし、どんなに精緻な理論モデルも完全ではないのと同様に、ラスキーのモデルも幾つかの課題を残しています。

ラスキーはマイケル・バサチーズの思考形態分類を発展させ、ピアジェで言うところの形式論理思考を獲得した後に、合計で28個の高度な思考形態(思考様式)が芽生えることを提唱しています。この28個の思考様式を特定するために、ラスキーは優れた測定マニュアルを構築していますが、実際に測定マニュアルに基づいて高度な思考形態の分析をしてみると、思考の深さを見ていくというよりも思考形態の分類を行っている感覚に陥ります。

つまり、本来は思考の深さ(意識の高度)を分析していくはずの測定手法が、どうも思考の種類を見分けることに留まっているのではないかと思うようになりました。もちろん、思考形態を分類した後に、その思考形態がどれだけ深く活用されていくのかを見てきます。その後、定量化し、最終的には「認知的発達スコア」というものが算出されますが、そこに思考の深さが適切に反映されているかというところでもないのではないかという疑問が出てきたのを覚えています。

---

認知的発達スコアの算出過程において、どれだけ多くの思考形態を活用しているかという点と各思考形態をどれだけ深く活用しているかという点が大切になります。しかし、ラスキーの測定手法の問題点は、思考形態を数多く活用していれば、それだけスコアが高く算出されてしまうことにあります。多くの思考形態を有することと深く考えることは同じではないと思うのです。

もちろん、多様な思考形態を活用できることは思考の柔軟性を示すことになると思いますが--実際に、ラスキーはこれを「柔軟性指標 (flexibility index)」として測定観点に入れていますが--、単純に思考形態の数がスコアに影響を与えるのは問題があるでしょう。また、各思考形態をどれだけ深く活用できているかの分析も、1-3段階で評価するのですが、明確な評価基準というものはなく、分析が恣意的であり、測定者間の信頼性 (inter-rater reliability) に関して課題を残しています。

インテグラル理論の観点から述べると、ラスキーが構築した測定手法は「レベル」と「タイプ」の両方が包摂されたユニークな測定システムです。しかし、上記の2点に関しては課題の残る測定手法だと考えています。

#### 【追記:参考になっている点】

確かにラスキーの測定手法には乗り越えるべき明確な課題が存在していますが、彼が提唱する意識の発達モデルや人間の思考に対する論考は示唆に富みます。700ページに及ぶ大著 “Measuring Hidden Dimensions of Human Systems”(IDM Press) は、彼の叡智が織り込まれた労作だと思います。

こちらの書籍は、以前私が翻訳をした “Measuring Hidden Dimensions”(IDM Press)の第二弾であり、第二弾の書籍についてもラスキーから翻訳を依頼されたのですが、内容が難解であることと分量の多さのため、翻訳を断ったという経緯があります。

そのため、ラスキーの功績を日本語で触れる機会がほとんどないと思われるので、少しずつでもラスキーの発達モデルや発達思想を紹介できたらと思います。

もし弁証法思考と同時に人間の知性発達に関心があれば、下記のような質問を投げかけるかもしれません。「知性発達理論はどのような思考を扱っているのだろうか？ 三段論法的な論理思考なのだろうか、それともより高度な弁証法的な思考についてなのだろうか？」

多くの研究成果が示すように、これまでのところ発達心理学は非常に抽象的な概念である「メタシステムの」という言葉で完結する三段論法的(トートロジー的)な論理思考を研究対象としてきました。科学の世界、そして近年では政治やビジネスの世界においても、こうした三段論法的な論理思考が勢力を強めています。その背景として、三段論法的な思考の重要性を説く書籍やそうした思考の意義を強く主張する人物が多数存在していることが挙げられるでしょう。

実際に、近年のビジネスパーソンは「論理思考(ロジカルシンキング)」「批判思考(クリティカルシンキング)」という言葉に踊らされ、それらを熱心に習得しようとしています。もちろん、それらを習得することはより高度な思考形態を獲得するために不可欠となります。しかし、あたかもロジカルシンキングやクリティカルシンキングが認知的発達の極致であり、それさえ磨いておけば安泰であるとうような無意識的な発想に絡め取られている気がしてなりません。それよりもむしろ、そもそもロジカルシンキングやクリティカルシンキングを超越した、さらに高次の思考形態を人間は獲得することが可能であるという事実を多くの人々は認識していないのかもしれない。

実際には、ロジカルシンキングやクリティカルシンキングといった三段論法的(トートロジー的)な論理思考は全くもって認知的発達の完成系ではないのです。それどころか、それらはピアジェで言うところの「形式論理思考(formal operational thinking)」の範疇にとどまるものなのです。

三段論法的(トートロジー的)な思考は、一見すると実に見事な論理の積み重ねによって客観的に現象の真実に迫ってくように見えます。しかしながら、論理の客観性を主張するあまり、自らの思考が内在的に持つ主観性に対して盲目的なところがあります。あるいは、厳密な論理の積み重ねによって導き出された結論が、あたかも客観性が完全に担保されているというような錯覚を覚えるのです。要するに、三段論法的(トートロジー的)な思考は、主観と客観を二分法的に切り離してしまい、自らの主観性に盲目的であったり、「客観性に対して客観的ではない」という問題を孕みます。

---

こうした二分法的な考え方は、人間の心にある種の「飢え」をもたらします。三段論法的(トートロジー的)な思考を鍛錬していくと、形式論理思考が持つ二分法的な発想の限界に気づく人が少なからず出てきます。これは確かに、形式論理思考を超えて、より高次の思考形態への歩みと言えます。しかし、形式論理思考を超えた直後に見られる問題は、形式論理思考を軽視しよとする衝動に駆られ、「ホリスティック思考(包括的な思考)」というきらびやかな言葉に魅了されたり、論理を超えたトランスパーソナルな体験を夢見るようになる、ということです。

「ホリスティック思考」や「トランスパーソナルな経験」を専門に扱う人は形式的な論理思考から解放され、より高度な思考形態を獲得しているという思い込みを多くの人は抱きがちです。しかし、ラスキーが提唱する弁証法思考の観点からすると、彼らの思考は高度であるというよりもむしろ、形式論理思考を不十分に鍛錬してしまったばかりに、形式論理思考では説明のつかない現象に魅了され、それらに対して単に囚われてしまっている場合が多いのではないかと危惧しています。

つまるところ、安易にホリスティック思考や形式論理思考では説明のつかない体験を追い求めるのではなく、まずは形式論理思考を徹底的に鍛錬することから始め、その先にはより高度な思考形態が存在するという強い認識を持つておく必要があるでしょう。

### 【追記:インド伝統医学アーユルヴェーダについて】

先週末、アーユルヴェーダのワークショップに参加してきました。アーユルヴェーダは、イスラム伝統のユナニ医学や中国医学と並び、古代インドから伝わる伝統医学です。

私がサンフランシスコでヨガのインストラクターの資格を取得した時に、偶然ながらアーユルヴェーダについて学ぶ講座が一つありました。その時は、「興味深い伝統医学があるものだなあ」という感覚しか持っておらず、深く学ぼうとしていませんでした。

さらに偶然が重なり、アメリカから日本に引越しを完了させ、輸送した荷物の段ボールから“Ayurveda and the Mind”という書籍を発見し、そこに書かれている意識論が深遠であることに改めて気づいたのです。

---

知性の成長・発達や意識の進化を考える際に、私たちの身体は切っても切り離せないものです。アーユルヴェーダは、アーサナ的なアプローチのみならず、食事実践にも奥深い体系をもっており、私たちの身体を駆動させるエネルギー源である食事を再考察する上で、今回のワークショップに参加しました。そこで得られた学びをどこかで紹介できたらと思います。

### 143. 相対主義的思考を超えて

人類史を眺めてみると、いつの時代にも合理主義的(rational)な知性段階から相対主義的(pluralistic)な知性段階に発達する人間が出現しています。特に、現代ではホリスティック思考などの相対主義的な思考法が注目を集めており、その勢力はますます拡大していると言えるでしょう。

しかし、相対主義的な発想には様々な盲点が存在しています。相対主義的な発想の限界を超克していくために、より高次の思考形態について見直す必要があるのではないのでしょうか。興味深いことに、高次の思考形態についての再考察は、これまでの人類史の中で度々行われてきたことでもありました。

相対主義的な思考や発想法がこれほどまでに勢力を拡張させた時代は、現代のみだと思いますが、今世紀初頭において相対主義的な思考を超えた高度な思考形態である弁証法思考を見直す歴史的な動きが見られました。

私が師事していたオットー・ラスキーから聞いた話によると、それは1930年代のヨーロッパにおいて、経済情勢の悪化や戦争に対する危機の影響を受けて起こったものであり、中心となったのはドイツのフランクフルト学派です。

当時において貨幣の価値はその日の朝から晩に掛けて目まぐるしく変化し、また政府の予算もまるでカジノゲームを行っているかのように予想のつかないものでした。経済情勢の悪化や戦争の危機といった非常に複雑な問題に直面し、一部の有識者は、それらの問題を形式論理思考を持ってしては乗り越えられないと直感的に気づき、問題の解決へ向けたより高度な思考形態を求めるようになったのです。

---

現代社会においても、当時の時代以上に複雑・難解な問題が山積みになっています。しかし、意思決定を担う階層において、単なる合理主義的な思考や相対主義的な思考が幅を利かせているため、1930年代の当時よりも高度な思考形態を希求する危機意識が希薄である気がしてなりません。

さらに、本来であればより高度な思考形態を探求するケン・ウィルバーの統合理論ですら、停滞状態に陥っているというのが現状です。知性発達理論の専門家が現代の相対主義的な風潮や統合理論の停滞状態を巧く打開できていない理由として、知性発達理論の専門家自身が相対主義的な発想の罠に絡め取られており、その限界を指摘するような強烈なメッセージを発信できていないことが考えられるでしょう。これは、私自身にとっても大きな課題としてのし掛かっています。

### 【追記: 弁証法思考・相反する感情・内なる矛盾】

今、何かに取り憑かれたかのように、自宅にある全ての専門書籍と学術論文を読み返しています。文字通り、全ての書籍と論文を順番に手に取り、その一瞬に目に止まる箇所を中心に再読をしています。

再読をしていて発見したのは、当たり前なのですが、以前には目に止まらなかった重要なメッセージに気づいたり、既存の知識と結びついて新たなアイデアが生まれたりすることが常に起こることです。

私の師匠であったオットー・ラスキーが論文の中で記述している弁証法思考と精神分析の大家フロイトの書籍で書かれていた「私たちはある感情を生み出す時、必ずそれとは逆の感情を内側に保持している」という言葉と哲学者キルケゴールが述べている「矛盾(パラドクス)というのは思索者の探求的情熱の源泉である。内側に矛盾をはらんでいない思索者は、感情を持たない愛人のようなものだ」という言葉は、つまるところ全て同じことを指摘していると思うのです・・・。



---

#### 144. 発達段階3(慣習的段階)から発達段階4(自律的段階)への移行支援について

最近、私の専門領域を問われる機会が多いので、ここでもう一度確認させていただきますと、私は成人以降の知性発達に関する学術研究(知性発達測定や測定手法の開発など)と学術理論を基にした臨床実践(企業組織向けの発達支援コーチングやメンタリング)に従事しています。

直近の半年間においては、研究機関から離れていたため、純粹に学術研究に従事していたわけではありません。しかし、有り難いことに、日本を代表する人事測定サービス提供会社と共同して、ビジネス社会で働く人たちの知性発達に特化したアセスメントの開発に着手し始めました。ようやく本業回帰というところでしょうか。

人間力や実務能力の成長・発達を学術的に探究する一方で、臨床的な実践にも従事しています。特に、成人以降の知性発達理論・意識発達理論を基にしたコーチングサービスを中核としています。今回の記事は、多くの日本企業が抱えているであろう自律人財育成という課題に対して、自律的段階へ至るために必要なことを発達理論の観点から幾つか紹介したいと思います。

ハーバード大学教育大学院教授ロバート・キーガンの知性発達理論に基づくと、依頼を受ける大抵の人財育成プロジェクトの主たる課題は、「発達段階3から発達段階4への移行支援」です。つまり、組織に従属し、自律的な自己決定ができない段階から、自らの意思決定基準に基づいて業務を推進できるような人財への成長が課題になっています。

多くの組織にとっては、それが喫緊の課題でありながらも、臨床実践に従事している立場からすると、そうした課題の解決は容易ではありません。特に、成人人口の約70%が発達段階3の要素を強く持っていることから推察できるのは、社会全体が私たちが段階3の行動論理に縛り付ける引力装置として機能しているということです。

広義においては社会全体と言えるでしょうが、狭義には、多くの組織が無意識的に私たちが発達段階3の行動論理に縛り付けていると言えます。そのため、段階4へ移行するために必要なのは、精神分析学の大家フロイト・メイが指摘するように、社会(組織)によって定義された既存の行動論理を乗り越えていく必要があるのです。

---

言い換えると、新しい独自の価値体系を構築するためには(段階4に到達するためには)、社会(組織)が作り上げた既存の価値体系と多かれ少なかれ格闘しなければならないということです。こうした格闘を避けてしまう場合、段階4への移行は実に達成し難いです。それゆえに、このような内面的な格闘の支援を行うのが発達支援コーチングの一つの重要な役割だと言えます。

さらに、「探究的な問いを自らに投げかけられるようになることが、真の意味での自己構築の始まりなのである」というロロ・メイの言葉は、真の意味で自律的な自己を確立するために必須の要素を言い当てています。別の表現をすると、社会や組織の声に盲目的に従うのではなく、内発的な問いを自ら発せられるようになることが自律的な自己(段階4)を確立することに不可欠なのです。

臨床実践において、自分が何をしているかを振り返ると、コーチング・セッションを通じて、クライアントが探究的な問いを自らに投げかけられるように支援することは、コーチとしての役割において外せない点であると思います。ロロ・メイの著作を読みながら上記のようなことを思い、備忘録としてまとめた次第です。

#### 【追記:「発達の原理」主体から客体への対象変容】

発達支援コーチングにおいて、一つ重要な原理が存在します。これは発達法則という言葉に置き換えることが可能です。それは何かというと、「ある段階から次の段階へ移行する際に、主体であったものが客体になる」という原則です。

これはまさに、ロバート・キーガンが提唱した「主体客体理論」から抽出された発達原理であり、私たちはある段階にいる時はその段階を主体として生きています。つまり、その段階を客体化することができず、その段階に埋め込まれている状態であると言えます。

より具体的には、慣習的段階(段階3)にいる場合、段階3の自分を客体化させることができないため、自分が段階3の行動論理に縛られているなど微塵にも思っていないのです。

---

ここから帰結される発達支援の要諦は、主体であったものを客体へ変容させることにあります。そのため、発達支援コーチングのセッションにおいて重要なのは、対話を通じて、主体を客体に変容させるための気づきをクライアントに与えられるかどうかであると言えます。

#### 145. アイダ・ロルフの名言:ボディワークと意識の成長理論に通底する考え

世間で頻繁に用いられる「性格類型」や「360度評価」などでは測定できない「認知の深層構造」に着目する意義はどこにあるのでしょうか？知性の発達理論に習熟した方であれば、この問いに対して明確な答えを持っているかもしれません。

しかし、日本において、成人期以降の知性発達理論の情報を日本語を通じてほとんど得られない状況を鑑みると、なかなか上記の問いに答えるのは難しいかもしれません。認知の深層構造に着目すべき理由は多々ありますが、一つ挙げるとするならば、「認知機能は認知構造によって制限される」という理由です。

ボディワークの一つ、ロルフィングを創始したアイダ・ロルフは「機能は構造によって限定される」という名言を残しています。これは、身体機能は身体構造によって限定されるということを意味しています。

ここで重要なのは、ロルフの名言は何も身体だけに当てはまるわけではないということです。彼女の至言は、身体の領域を超えて心の領域にまで拡張適用することが可能です。つまり、「意識の機能は意識の構造によって限定される」と言えます。

これが何を意味するかというと、例えば、企業社会で広く活用されている性格類型や360度評価は、ある意味で、意識や知性の機能的側面を映し出しているに過ぎず、機能を限定する構造にまで踏み込んで評価・測定をすることができていないのです。

ロルフが指摘しているように、身体の治癒を実現させるためには、身体の機能を超越して身体の構造に働きかける必要があります。これを企業社会での人財育成や人財開発に置き換えて考えてみると、人間の意識の成長・発達を実現させるためには、意識の機能を超越して意識の構造に働きかけていく必要があるのです。

---

ボディワークと意識の成長・発達理論は一見すると異分野でありながらも、お互いに密接に関係し合っており、そこで語り継がれる叡智というのは実に共通したものであると気付かされます。

#### 146. ニューヨーク在住時代の恩人「井筒俊彦」先生

現在、日本を代表する哲学思想者の一人、井筒俊彦先生の書物を読み返しています。大学時代に初めて井筒先生の「意識と本質」を手に取り、そこに書かれていることをほとんど理解できなかったながらも、思想の射程の広さとその深さに衝撃を受けたのを今でも鮮明に覚えています。

当時の私は会計学や金融工学の学習に心血を注いでおり、なぜ当時の私が井筒先生の「意識と本質」を購入したのか定かではありません。もしかしたら、当時の私の無意識は、定量的なアプローチのみで世界を記述しようとする、客観世界の手法に対する欺瞞で満ち溢れていたのかもしれない。

井筒先生の書物を改めて読み返すようになったのは、アメリカの思想家ケン・ウィルバーの意識論に出会った頃でしょうか。ウィルバーの書籍を読みながら、そういえば同じような関心テーマを持って探求をしていた日本人学者がいたなと思い返し、井筒先生の書籍を再読していたのを覚えています。

もちろん、ウィルバーが成し遂げた、西洋心理学と東洋思想の意識段階モデルの再編纂という偉業は、今尚色褪せることはありません。しかし、私から見ると、意識と言葉(言語)の繋がりに関する論考がそれほど充実しておらず、人間の意識に対する思索を推し進めていく際に、その点だけ物足りなさを感じていました。

それに対して、井筒先生はウィルバーほど精緻な意識段階モデルを提唱していませんが、逆に、意識と言葉の関係性に対する考察には息を飲まされます。私自身の原体験から、プラトン、アリストテレス、プロティナスの系譜を受け継ぐ「神秘哲学」に対する井筒先生の思索に感銘を受けたのは間違ありません。それと同様に、あるいはそれ以上に、井筒先生が繰り広げる言語哲学の深遠さは、千言万語を費やしても表現し得ないものだと思います。

---

忘れもしないのは、私がニューヨークで働いていた頃、改めて言葉と意識との関係性を考えざるを得ない実存的状況に追い込まれた時、井筒先生の「意識の本質」の存在を思いだし、絶望的なまでにこの書籍を再度読み込みたいと思うようになりました。

しかし、サンフランシスコから引越しをする際に、あろうことか「意識の本質」を日本の実家に送ってしまったのです。どうしても「意識の本質」を読み返したいという衝動は収まらず、マンハッタンにあるブックオフに行った際に、この書籍が2冊本棚に置かれているのを目にし、途轍もない安堵感と幸福感に包まれたのを覚えています。

米国に移住して以来、言語を超越した知覚世界が確かにありありと存在しているという体験を幾度となくするようになり、言語を超越したリアリティを作り上げる、もしくは覚知する人間の意識のメカニズムに強い関心を持っていました。

さらに、認知的発達心理学者として、研究上かつ仕事上、話し言葉や書き言葉から他者の言語構造を分析・測定するという事に専心していたため、言語で構築されるリアリティを超越したリアリティに対して、ある種病的なまでの探究心を抱いていました。

ニューヨーク在住時代は、言語が持つ「呪術的・魔術的作用」に関心があり、“Language and Magic (邦訳なし)”という書籍をマレーシアの書店から取り寄せて読み耽っていたのが懐かしいです。日本に一時帰国してみて、今再び井筒先生の書物を読み返す時期にあるとひしひしと感じています

井筒先生はすでにお亡くなりになられていますが、私にとってニューヨーク在住時代の精神的な支えであり、精神的な恩人でもありました。人間の意識発達とその作用に関して、日本にウィルバーを凌ぐ碩学の巨人がいたことをここに明記しておきたいと思います。

### 【追記:井筒俊彦全集】

井筒俊彦先生が展開した言語哲学や意識論を含めて、彼の思索を時系列的かつ網羅的に辿るための指南書として「井筒俊彦全集」(慶應義塾大学出版)は大変優れた全集です。

---

全集に入る前に、井筒先生の言語哲学と意識論のエッセンスに触れてみたい方には「井筒俊彦：言語の根源と哲学の発生」を強くお勧めします。多様な哲学者や思想家が独自の視点から井筒哲学を解説しています。

これまでのところ、構造的発達心理学の始祖ジェームズ・マーク・ボールドウィン全集 “Selected Works Of James Mark Baldwin Vol.1-6” (2001, Thoemmes Press)、教育哲学者ジョン・デューイ全集 “The Essential Dewey Vol.1-2” (1998, Indiana University Press)、プラグマティズムの始祖かつ記号学の大家チャールズ・サンダース・パース全集 “The Essential Peirce Vol.1-2” (1992, Indiana University Press)、意識研究の開拓者ウィリアム・ジェームズ全集 “The Writings of William James: A Comprehensive Edition” (1977, University of Chicago Press)、統合理論の提唱者ケン・ウィルバー全集 “The Collected Works of Ken Wilber Vol.1-8” (1999, Shambhala)など、少ないながらも、そうした偉大な思想家の全集を読んできた経験からすると、全集を購入されることを強くお勧めします。

全集を読むことによって、その人物の思想を単に網羅的に把握することだけではなく、思想形成プロセスも辿ることができるからです。何より、全集の良さは、その人物の全てと向き合い、格闘の末、彼らの叡智を幾分ながら驚掴みにできることでしょうか。もし、ある思想家を心の底から愛することができたら、その方の全集を読んでもというのもいいかもしれません。逆に言うと、心の底から愛することができていなければ、全集を読み進めることなどできないでしょう。読了後、その思想家との決別が待っているかもしれませんが、探求の開始を後押しするのは、常に愛ではないでしょうか。

#### 147. 意識の成長・発達に必要なもの: ジョージ・オーウェルの言葉より

成人以降の知性発達理論に関する講演会や講義をさせていただくと、頻繁に「意識の成長・発達を促す方法はどんなものがありますか？」という質問を受けます。正直なところ、人間の意識という内面宇宙はあまりに広大であり、物理宇宙と同じように無限の広がりを持っているため、何か一つ特定の手法を教示することは難しいです。

---

しかし、これまであまり公の場で語っていないのですが、人間の内面宇宙を規定するのは「言語」と「身体」だと考えています。つまり、言語と身体へどのように働きかけ、それらの成長・発達を促していくかが、意識の成長・発達の鍵を握ります。

まず言語に関して、皆さんは日頃の生活においてどのような質の言語に触れているのでしょうか？残念ながら現代の日本社会において、重厚かつ精巧な日本語をお目にする機会というのは少なくなってきました。

さらには、一般的なビジネスパーソンが熱心に読んでいるビジネス書や自己啓発書の類で使われる日本語や情報の質は、極めて低いと言わざるを得ません。特定分野の専門書であれば、話は変わってきますが、一般的に、ビジネス書や自己啓発書で構築されている情報空間に浸っている、それより高次の情報空間を築き上げることはほとんど不可能だと思います。

それどころか、近年では、TVに代わる「第二の愚民育成装置」と評される、スマートフォンに縛られて生きている人が多いのではないのでしょうか？そうしたメディアで流れる情報の渦に飲み込まれてしまうと、意識の成長・発達はより一層困難なものになります。

人間の知性が成長・発達をしていくと、意識という内面宇宙の中に、より複雑かつ抽象的な情報空間が出来上がります。要するに、意識の進化には知性の成長・発達が不可欠であり、知性の成長・発達を実現させていくためには、質的に高度な情報と向き合い、格闘していく必要があります。

「1984」の作者であるイギリス人作家ジョージ・オーウェルは「ずさんな言語は、ずさんな思考を招く」と述べていますが、まさにその通りだと思います。ずさんな言語に触れていると、自ら発する言語もずさんなものになり、それがずさんな思考を招きます。ずさんな思考に陥るということは、すなわち、知性の成長・発達を阻害することにつながります。

ジョージ・オーウェルの言葉に付け加えるならば、「ずさんな身体は、ずさんな思考を招く」ということも指摘しておきたいです。若干言葉尻を強くすると、「たるんだ身体は、たるんだ思考を招く」と言えます。つまり、物理的な身体の鍛錬を怠り、身体意識が十分に養われていなければ、知性の成長・発達が必ずどこかで停滞するのではないかと思っています。

---

私自身がヨガのインストラクター資格を取得し、長らくヨガを実践しているという経験と合気道や太極拳を実践しているという経験から、上記の言葉は相当妥当性が高いのではと推測しています。なぜなら、思考空間が成長・発達し、扱う情報内容がますます複雑化・抽象化されてくると、そうした情報を扱うのに耐えうるだけの微細な身体意識が不可欠だと考えているからです。

私たちは頭で思考しているように思われがちですが、実際には全身で思考し、さらに抽象的な情報を扱うようになればなるほど、微細な身体(サトルボディやコーザルボディ)などを総動員して高度な情報と対峙することが要求されます。

ケン・ウィルバーのインテグラル理論を母体とした統合的な実践「インテグラル・ライフ・プラクティス」で提唱されているように、少なくとも一つ、ボディの実践を取り入れる必要性があると再認識しています。結論を述べると、意識の成長・発達には、少なくとも「言語の鍛錬」と「身体の鍛錬」が要求されると考えています。

**【追記:「成長は善である」という思想に囚われないように】**

ただし、上記の文章を読んで、言語の鍛錬と身体の鍛錬を始めようと即座に思われた方は、もしかしたら「成長は善である」という物語に絡め取られている可能性があることに注意が必要です。「意識の成長・発達論」という物語に対して、透徹した醒めた目を持ちながら、言語と身体の鍛錬に励んでいただければと思います。

#### 148. ロバート・キーガンの業績とマイケル・バサチーズの業績の統合

私が長らく師事をしてきたオットー・ラスキー博士は、ハーバード大学教育大学院時代に、ロバート・キーガンとマイケル・バサチーズに師事をしていました。私がラスキーの下で学習を進めていて気付いたのは、ラスキーはキーガンとバサチーズの両方の理論体系を統合させるような試みに従事していたということでした。

今回の記事は、キーガンとバサチーズの対象領域の違いを中心に、ラスキーが試みた理論的な統合作業を概観していきたいと思っています。



---

ロバート・キーガンは、ハーバード大学大学院時代に、モラル発達研究の大家ローレンス・コールバーグとアイデンティティ発達研究の大家エリク・エリクソンに師事をしていました。1982年にキーガンは、コールバーグとエリク・エリクソンの考えをさらに一歩先に進めるべく、独特なインタビュー手法を通じて実証的に意識の発達段階を明らかにする理論的な枠組みを考え出しました。

このインタビュー手法は、「主体・客体インタビュー」と呼ばれており、意識の発達段階を明らかにするための測定手法です。そして、これは現在でも活用されています。このインタビュー・メソッドは、その後バサチーズに受け継がれていきました。

ここで注意が必要なのは、キーガンは「人間が経験をどのように認識し、その経験に対してどんな意味づけを行っているか」に焦点を当てたのに対して、バサチーズは「思考そのもの」に焦点を当てていたことです。つまり、多様な知性領域の中で、キーガンは自我の発達領域(あるいは自己認識の発達領域)を扱い、バサチーズは認知の発達領域を扱っていたのです。

対象領域の違いから、キーガンとバサチーズは異なるインタビュー手法を活用するようになりました。確かに、キーガンもバサチーズも人間の「認知」を研究していたのですが、認知に対する考え方が両者において異なっていたのです。

ラスキーが着目したのは、まさに両者の違いであり、ラスキーは古典的な哲学思想の観点を持って、両者を統合させようと試みたのです。ラスキーは、1956年から66年にかけてフランクフルト学派に属し、「啓蒙の弁証法」で有名なマックス・ホルクハイマーとテオドール・アドルノに師事し、哲学への理解を深め、その後多くの時間を臨床心理学と発達心理学の学習に費やしてきました。

そして1997年にラスキーは、キーガンとバサチーズの研究内容には大きな違いがあるということに気づき、「AであるものとAではないものを結びつける」という発想を用いて、両者の研究内容を弁証法的に統合させる決意に至ったと述べていました。

具体的にラスキーが発見した点は、キーガンの研究においては「認知」と呼ばれるものが、単なる社会的・感情的発達における意味構築活動に組み込まれていたということです。そして不幸にも、バサチーズが言うところの「認知」は、単に思考形態(思考のパターン)を扱う狭義の認知領域に限定

---

されていたのです。それらの限界を克服するために、ラスキーが生み出したのが「構成構造主義的発達理論のフレームワーク」だったのです。

【追記:ラスキーが達成したことは果たして統合なのか?】

私は今でもラスキーと定期的に連絡を取り合う関係を継続させていただいており、彼の人柄と学術的な功績に対して敬意を表しています。ただし、1点ほど疑問があるのは、ラスキーはキーガンとバサチーズの理論体系を本当に統合したのかどうかということです。

ラスキー自身は、弁証法思考という高次元の思考形態について長らく探求をしており、彼自身もそうした思考形態の体得者だと思われます。しかしながら、キーガンとバサチーズの両理論体系を統合したとは思いがたい点があります。

「統合」という言葉の最も簡潔な意味は、二つ以上のものを結合させ、一つにまとめあげることです。この意味からすると、ラスキーは確かにキーガンとバサチーズの理論の差異に気づき、両者を結びつけ、「構成構造主義的発達理論のフレームワーク」という一つの理論体系にまとめあげたと言えるでしょう。

しかし、「統合」の真の意味は、二つ以上のものを結び合わせ、新たなものを創出することだと個人的に思うのです。新たなものを創出する点において、ラスキーの統合化は弱いのではないかと思います。つまり、ラスキーは二つの理論的枠組みを合併させることには成功したが、新たなメタ理論を構築することには至っていないのではないかと思います。

ラスキーが提唱した構成構造主義的発達理論のフレームワークの内容を精査すると、それがメタ理論であるというよりもむしろ、キーガンとバサチーズのシステムの単なる複合体理論であるという性質が強いことに気づきます。

学術の世界において、「統合」という麗しき言葉をよく耳にしますが、そこで実現されていることが果たして真の意味で統合なのか精査する必要があるでしょう。

---

上記の疑問に関して、もう一度ラスキーの著作集を当たり、彼が何を新たに創出したのか吟味し直したいと思います。

#### 149. 高度な認知レベルの体現者＝無駄のない思考運動の体得者

現在、未読の書物を紐解くことと並行して、既読の書物や学術論文を読み返すことを行っています。改めて、再読の価値とは、初読当時の自分では気づかなかった重要事項や新たな意味を発見し、新たな自己を通じて、それらと向き合わせてくれることにあるなと思います。

カート・フィッシャーとチェン・ヤンが執筆した“The Development of Dynamic Skill Theory”という論文を読み返しながら、高度な認知レベルを体現している者は、無駄のない思考運動の体得者であると形容することができる気付かされました。

彼らの研究で一つ興味深いのが、「認知レベルの高い熟練者は、あるタスクに直面すると、最初は低いスキルレベルを発揮するが、すぐにタスクレベルに適応し、それに合わせたスキルレベルを発揮することができる。一方、非熟練者は、あるタスクに直面すると、極度に変動性の激しいスキルレベルを発揮し、安定したパフォーマンスを発揮するのに多大な時間を要する」という発見事項です。

ここから連想されるのは、ある領域において認知レベルが高度な熟練者は思考運動において、無駄な動きがないということです。それはまるで、波をうまく乗りこなすサーファーのように、要求されるタスクレベルの波を適切に掴み、その波を乗りこなすのに必要最低限の認知力を発揮しているかのようなのです。

それに対して、ある領域において認知レベルが高くない素人は波乗りが巧みではなく、無駄な思考運動をせざるを得ず、結果として、乱高下の激しい認知力を発揮してしまう、という事態に陥ります。

確かに武道の達人などを見ていると、相手と対峙した時に、自分が潜在的に持つ能力を全て発揮しているかというところではなく、相手をいなす程度の能力しか発揮していないように思えるのです。つまり、武道の達人は、身体的に無駄のない動作を行っているだけでなく、認知的にも無駄のない能力を発揮していると言えるのではないのでしょうか。

---

一方、私自身の合気道のトレーニングを思い出すと、熟練者の方や師匠から頻繁に、「身体が強張っている」「無駄な力を入れすぎている」という指摘を受けてきました。つまり、武道の初心者は、身体に無駄な力が入り、身体動作が円滑ではないのです。

武道のように身体動作が主たる要素だと思われる活動も、実際のところは認知能力が密接に関わっています。合気道という文脈の中に置ける私は、身体運動と認知運動(思考運動)ともに、無駄な力が入り、そこで発揮される力というのは非常にばらつきがあるなど考えさせられました。

言うまでもありませんが、こうした事態は何も武道に限らず、組織社会で働く人すべてに当てはまることだと言えるでしょう。認知が関与しない仕事というのはほとんど存在しないと思うので、一度ご自身の仕事を振り返り、自分がどのような身体運動を行っているか、つまり、どんなスキルレベルを発揮しているかを内省してみると何かしらの気づきや発見事項があるかもしれません。

#### 150. 「真実構築活動」と「意味構築活動」を架橋する能力

私が直接的に師事をしていた発達心理学者のオットー・ラスキーの言葉が、最近妙に思い出されます。ここ2年間は、私がインターンとして働いていた、マサチューセッツ州のLecticaという組織の設立者セオ・ドーソンやハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーの理論モデルや測定手法に習熟するための期間でした。そのため、この2年間は、ラスキーの理論や測定手法から少し距離を置いていたと言えるでしょう。

ところが、ここ最近、ラスキーが当時述べていた話の中で、今の私の関心事項に関係してくる話題が多々あったことに気付かされます。ラスキーは、これまでの記事で述べてきたように、フランクフルト学派で哲学を修め、その後、ハーバード大学にてロバート・キーガンとマイケル・バサチーズの功績を哲学的に再考することを始めました。

当時の私は、キーガンとバサチーズの理論的枠組みを哲学的に捉え直すというラスキーの試みに対して、あまりその内容を理解していなかったように思うのです。今、改めて考えてみると、どの発達理論の大家も固有の発達思想を持っています。

---

すなわち、発達論者によって、「発達」という言葉の意味するものが異なり、対象とする発達領域も実に様々であるということです。それに加えて、ピアジェ派のように、発達を静的な構造的進化とみなすのか、新ピアジェ派のように、発達を動的な構造的進化とみなすのかという大きな思想上の差異も存在します。

ラスキーが行っていたことは、キーガンとバサチーズがどのように発達現象を捉えているのか？という問いに対して、哲学というレンズを通して答えようとするものでした。そこでラスキーが最初に行った手段は、哲学者ハンナ・アレントが古代西洋哲学において「真実」と「意味」は常に区別されるものであったと指摘したように、「真実」と「意味」を明確に区分することでした。

アレントは「真実構築活動」と「意味構築活動」を区別しましたが、彼女はどちらの活動も人間の心によって行われるということを否定しませんでした。彼女が指摘したのは、両方の活動を混合してしまい、両者の関係を明確にしないことは哲学的な誤謬であるということです。

こうした意味においてアレントは、ホリスティックかつ弁証法的な思考を行っていたと言えます。ラスキー曰く、キーガンはアレントの「真実構築活動」を認めず、人間は絶えず意味を構築する生き物であるという「意味構築活動」を強調しているのは周知の事実です。

そして、ラスキーは、人間の意識という一つの共通基盤の中で生じる、互いに相異なる「真実」と「意味」はどのように関連し合っているのかということを考えるに至りました。

“Measuring Hidden Dimensions of Human Systems”を執筆している最中、ラスキーは両者の間に存在する一つの明確な関連性は、「内省的判断力の発達」であると思うようになったと述懐していました。確かに、ラスキーは、内省的判断力の発達を研究していたパトリシア・キングとカレン・キッチナーの理論モデルを援用し、キーガンとバサチーズのモデルを架橋しようとしていたのだと、今になって気付かされました。

内省的判断力の発達とは、不確実なものに対処しようとする内省能力の変化を表します。キングとキッチナーは、内省的判断力の発達に関して、子供が不確実性を理解するのに苦しむということ、

---

あるいは「周りにいる誰か(母親、教師、牧師など)が真実を知っている」と考えることによって不確実性に対処しようとすることを指摘しました。

つまり、内省的判断力は不確実性の最中においても、それに麻痺することなく、真実を探求し、独自の意味を構築する能力だということです。ラスキーは、キーガンとバサチーズの理論が対象とする領域を区別した上で、両者を繋ぐ架け橋となる知性領域として、内省的判断力を採用したのでした。

### 151. クラニオセイクラル・セラピーを体験して: 脳の成長と意識の発達の相関関係

先日、知人の紹介を受けて「頭蓋仙骨治療法(クラニオセイクラル・セラピー)」というボディワークを体験しました。JFK大学院時代に、心と身体の関係を中心とし、様々なボディワークについて扱う身体心理学の授業を履修していたのですが、頭蓋仙骨治療法(craniosacral therapy)の名前を聞いたことはありませんでした。

しかし、当時の課題図書を丹念に再読してみると、頭蓋仙骨治療法について記述があることを最近知り、どのようなものか大変興味がありました。

以前の記事で、身体意識が認知の構造的発達に多大な影響を与えるということを書きましたが、それに付け加えて、脳の健全な構造と機能は、認知の構造的発達に不可欠であると改めて認識しています。

ハーバード大学教育大学院教授のカート・フィッシャーは、脳波を測定するEEGを活用し、脳の成長サイクルと認知構造の発達サイクルが極めて強い相関性を持っていることを明らかにしました。例えば、フィッシャーで言うところの認知レベル9(ピアジェで言うところの形式論理思考段階)を發揮するためには、それ相応の脳の発達が要求されます。

インテグラルコミュニティにおいて、ヴィジョン・ロジック(vision-logic)と形容される高度な認識能力は、フィッシャーのスキル理論で言うとおおよそ認知レベル12に対応していますが、正直なところ、こうした高度な認識能力を發揮するための器、つまり、脳の構造的基盤が確立されていなければ、そうした高次元の認識能力を發揮することは到底できないのではないかと最近強く感じています。

---

逆説的には、脳の構造的な基盤を整備し、脳が健全な機能を発揮できるようになれば、高次な認識能力を獲得する第一歩となるのではないのでしょうか。要するに、脳の機能が健全になることによって、高次の意識状態に参入しやすくなり、より高度な認識能力を発揮することにつながりうるということです。

頭蓋仙骨治療法では、頭蓋骨の動きを調整することによって、呼吸しながら頭蓋骨と仙骨がバランス良く動くことが可能となり、脳と脊髄を包んでいる膜の中を流れている脳脊髄液の循環を改善し、私たちの身体が本来持つ治癒力や生命力を回復・改善することにつながるという考え方を持っています。

現代人の脳は、様々な要因によって構造的な歪みと機能的な限界を抱え、それが高度な認知能力を育む際の障壁になっていると思います。ほとんどの成人は、脳にそうした歪みや機能的限界を抱えているため、高度な認識能力を一生獲得することはない、というのは極めて腑に落ちます。

頭蓋仙骨治療法は、そうした脳の構造的な歪みを整え、機能を改善させるための優れたボディワークの一つだと思います。

### 【追記：クラニオセイクラル・セラピーと臼井靈気の施術者として】

私自身は思ってもみなかったのですが、ひょんなことから、クラニオセイクラル・セラピーでお世話になっているセラピストの方から、クラニオセイクラル・バイオダイナミクスの施術者として活動するためのトレーニングを受けました。さらに、それに付随して、臼井靈気のトレーニングまでも提供して下り、あれよあれよと言う間に、臼井靈気のマスター資格を授与していただきました。

現在の私は、知性発達科学の研究者、そして探求活動から得られた知見をもとに、企業社会における人財開発コンサルティングをさせていただいています。そのため、現時点において、私はセラピストとして治癒的活動に従事することはないと思いますが、クラニオセイクラル・バイオダイナミクスや臼井靈気との出会いは、偶然でもあり、必然でもあったと思っています。

---

お世話になっているその施術者にお会いする少し前からやたらと、プラトン、プロティナス、ライプニッツ、アンリ・ベルグソン、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、井筒俊彦など、超越的形而上学の世界を覗いていたと思われる人たちの思想に取り憑かれていました。

しかし、そうした思想に取り憑かれている理由を理解することは、意識的な自分(自覚的な自己)では不可能でした。また、彼らが展開する超越的リアリティの扉を覚知しながらも、扉を開ききれない自分、あるいは要諦を掴み損ねている自分がいるのを把握していました。

そこで偶然のきっかけで出会ったセラピストの方から、クラニオセイクラルのワークを受けることによって、多大な気づきをもたらされました。また、その方からの種々のフィードバックによって、上記の謎が氷解し、確固とした足取りで探求活動を再始動することができるようになったのです。

「治癒」と「発達」は、両者密接に関わりあった不可分なものであるという性質上、もしかしたら、いつかどこかで、治癒的活動にも従事することになるかもしれません。

#### 152. 人財育成に蔓延する歪な「平等主義」: 生得説の欠落

人間の発達を考える際に、発達は先天的なものであるという「生得説」と、発達は後天的なものであるという「経験説」があります。どちらの説を採用するかは、長らく発達理論の分野において議論された論点です。

現代の発達科学の研究が明らかにしているように、どちらの説も一定程度正しいのです。しかし、人財育成コンサルティングや臨床実践(発達コーチング)を行っている経験からすると、どうも企業社会では生得説に対する認識が薄いような気がしているのです。

「人財育成」という言葉の裏には、「人間はトレーニングによって必ず成長していく存在である」という発想が横たわっています。人間心理として、誰もが成長を希求する欲望を持っているのは周知の事実ですし、人間には無限の可能性があるという言説に乗っかりたいという思いが生じるのは仕方ないでしょう。



---

しかし、こうした発想はどれも、人間は環境や学習によって成長する存在であるという経験説に裏打ちされているものであり、生得説の観点が抜け落ちてしまっているのではないのでしょうか。

生得説の観点からすれば、人間の成長には生まれついて持った固有の限界が存在します。それにもかかわらず、企業社会はこうした固有の限界を考慮に入れず、「全ての人間はトレーニングによって成長する」という、ある種の歪んだ「平等主義」を信奉しているのではないのでしょうか。

身も蓋もない言い方をしてしまうと、いくら質の高いトレーニングを提供しても、伸びない人は伸びないのです。身長170cmの人間に対して、専属トレーナーを付けて垂直跳びの訓練を毎日積みめば、ダンクシュートができるようになるから頑張れと背中を押したところで、ダンクシュートができるようになるとは到底思えません。

もちろんここで取り上げている「成長」や「発達」というのは、認知的発達心理学の枠組みに基づく、垂直的な認知構造の発達のことを指しています。そのため、トレーニングをすれば、表面的なスキルが身につくという効用はあるでしょうが、垂直的な発達に限って言うと、その人に相応の資質が備わっていなければ、発達など起こりようがないのではという考えを最近持っています。

「発達理論や学習理論の枠組みに基づけば、万民の成長を促すことができます」という主張は、一見すると親切に思えます。それに対して、「生得説と経験説のどちらも考慮すると、いくらトレーニングを積んでも成長しない人は成長しないので、無駄なトレーニングは控えましょう」という主張は、一見すると不親切に思えます。

さて、どちらが真の意味で親切な(真っ当な)主張でしょうか。もちろん、人間に与えられた潜在力を顕現させるために、発達理論や学習理論に習熟した支援者や教育者が必要になるのは言うまでもありません。

ただし、それと同時に大切なのは、そもそもその人間に賦与された資質を見抜く眼力を備え、上記のように、「真の意味で親切な提言」に基づいて支援を行うことではないのでしょうか。個人の生得的・内在的な資質を無視した、安直な支援やトレーニングは、悲劇しかもたらさないとと思うのです。

---

## 【追記: 生得説と経験説】

生得説と経験説は実に精妙な概念関係が締結されていると思います。その様子は、陰と陽の関係、もしくは影と光の関係に形容できるのではないのでしょうか。

すなわち、一方の言説を選択すると他方が見えなくなり、片方の言説のみを信奉してしまうという事態が生じます。インテグラル理論で言うところの、高度な認識形態「ヴィジョン・ロジック」に到達していなければ、両者を同時に把捉することは不可能です。

### 153. 社会的・感情的発達と認知的発達の関係性

発達心理学者のオットー・ラスキーは、ロバート・キーガンの発達理論を「社会的・感情的発達理論」と命名し、マイケル・バサチーズの発達理論を「認知的発達理論」と命名しています。私がラスキーの下で学習していた時、彼は、両者の理論は異なる発達領域について扱っていると頻繁に述べていました。

社会的・感情的発達というのは、私たちが自分自身や他者(社会も含む)をどのように認識しているのかを表し、特に自分の感情と向き合うための器の発達を指します。別の表現をすれば、社会生活を営む際に発揮する「自己認識能力」や「他者認識能力」の発達を扱うのが、社会的・感情的発達領域です。

一方、マイケル・バサチーズが探求していた認知的発達領域は、純粹に物事を思考する力を扱います。抽象的な概念や理論をどれだけ巧みに操作し、それを言語で表現できるのかを探求するのが、ここで言う認知的発達領域です。

それでは、これら二つの発達領域はどのような関係になっているのでしょうか？それを考える際に鍵を握るのは、「認知的発達は他の知性領域の発達に必要であるが、十分ではない」というケン・ウィルバーの指摘です。

---

つまり、何らかの対象を純粋に思考する力は、他の知性領域の発達にとって必要条件であるが、思考力がありさえすれば、他の領域の発達が促されるわけではないということです。

これに基づいて考えてみると、社会的・感情的発達と認知的発達の関係性が見えてくるのではないのでしょうか。社会的・感情的発達領域は、社会生活の中で発揮する自己認識力や他者認識力を扱うという性質上、そこには必ず意味を生成する力が関わってきます。

すなわち、自分を認識する際には、必ず自分の感情や存在に対して独自の意味づけを行っており、他者を認識する際にも同様の意味づけを行っているため、社会的・感情的発達領域には意味を生成する力が不可欠となってきます。まさに、キーガンが「人間は意味を構築する生き物である」と述べているように、社会的・感情的発達領域と意味構築能力は密接に関わっているのです。

ただし、意味を構築する力の土台にあるのは、概念を操作する力を扱う認知的発達領域です。なぜなら、私たちは概念なしでは意味など構築することができないからです。

このように考えてみると、認知的発達は社会的・感情的発達の土台に該当するものであり、そうした基礎基盤の発達が不十分である場合、社会的・感情的発達は促されない可能性があります。

ラスキーも指摘しているように、社会的・感情的発達が認知的発達にもたらす直接的な影響はほとんどないが、認知的発達は社会的・感情的発達に強い影響をもたらすというのは妥当性が高いと言えるでしょう。ただし、まだ十分な実証結果が出ていないので、こうした相互の影響性について断定はできないという注意点があります。

#### 154. 内的宇宙と物理宇宙の共通事項: 認知レベルと次元について

自分が視野狭窄に陥っていると感じた時、あるいは発想を大きく展開したい時に、私は科学雑誌「ニュートン」を眺めるようにしています。特に、宇宙をテーマとして扱った号に目を通すと、不思議なことに、意識の拡張現象が起こり、視界が開け、再び俯瞰的な視野を持って物事を考えられるような感覚になります。

---

認知的発達心理学の中でも、知性発達理論に焦点を当てて探求をしていると、物理的な宇宙と人間の心という心的宇宙(内面宇宙)は共通事項が多いことに気付かされます。例えば、認知レベルが上がるという内的宇宙内の現象と次元を上げるという物理宇宙内の現象は、ほぼ同義なのではないかと思います。

どういうことかという、人間の知性段階が上がるという現象は、まさに思考の次元が上がるということの意味しており、一つ上の次元に跳躍すると、これまでの次元では掴むことのできなかった現象を理解することができるようになるということです。

例えば、一次元の直線上の動点の前後に仕切り線を入れると、その点は直線上から逃れることができません。その点を開放してあげるにはどうしたらいいかという、その点の周りに二次元平面を作れば良いのです。そうすることによって、点は二次元平面で活動できるようになります。

それでは、その点が二次元平面の中で四角形の檻に入れられて身動きが取れない場合、どのようにして開放してあげればいいのでしょうか。同様の論理と手順で、二次元平面に高さを加えてあげると、点は見事に二次元平面から脱出ができます。

さらに、三次元空間の檻に閉じ込められた人間を脱出させてあげるには、四次元空間を活用してあげれば良いのです。要するに、この例で言わんとしているのは、「低い次元で不可能なことであったとしても、高い次元に到達すれば、それは可能になる」ということです。

これと同様のことが認知レベルという思考の次元においても当てはまります。つまり、思考の次元が上がることによって、これまで見えなかったものが見えるようになり、これまで解決の糸口を見つけられなかった問題の解決策を発見できるになるということが生じます。

こうした思考の次元拡張は、現代の多くの職業人に求められていることではないでしょうか。企業人に話を限って言えば、CEOであれば思考の次元を上げて、より高い視点で経営に携わる必要があるでしょうし、営業担当やコンサルタントであれば、クライアントに何かサービスの提案をする場合、クライアントの課題が何かを把握するために、思考をクライアントよりも一次元高く引き上げる必要があるでしょう。

---

人財育成に携わるトレーナーであれば、トレーニングを受ける者よりも当然ながらトレーニングマテリアルに熟知しておく必要があり、トレーニングを受ける者と同じ次元の思考をしていては有意義なトレーニングを提供できないでしょう。

このように認知能力を活用する多くの職業人の場合、思考の次元を上げることができなければ、クライアントに対して有益なサービスを提供できないと思われま

### 【追記:名もなき引用】

「地球はとても複雑だ。しかし、天空はもっと複雑だ。しかし、宇宙はもっと複雑だ。しかし、人間の心はもっとずっと複雑だ。」引用元不明

## 155. 認知レベルと情報量の関係

前回の記事で、認知レベルと次元の話を取り上げました。それに付随して、人間の認知レベル(思考次元)と扱える情報量には、密接な関係があるという点も大事になります。

認知レベルの測定をしていると、興味深いことに、それまでの認知レベルでは使われなかったような表現や語彙が出現します。例えば、「優れたリーダーとは？」という質問に対して、ある認知段階において「優れたリーダーとは、メンバーを楽しませてくれる人」という回答があり、それよりも上の認知段階になると、「優れたリーダーとは、組織に対する有能な奉仕者である」という回答に変化するとします。

この時に、「メンバーを楽しませてくれる人」と「有能な奉仕者」とでは、どちらの言葉の方が多くの情報量を含んでいるのでしょうか？ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーをはじめとして、新ピアジェ派を中心とした認知的発達心理学者が述べているように、人間の知性が発達するという現象は、究極的には思考の抽象性と複雑性の増大プロセスです。

---

その点を考慮すると、「有能な奉仕者」という言葉は、「メンバーを楽しませてくれる人」という言葉に比べてより抽象的であり、「優れたリーダーとは？」という質問に対する思考がより発達していると言えます。

認知能力が発達すればするほど、思考の抽象性が高まり、抽象性が高まるということは扱える情報量が拡大することに他なりません。前回の記事と同様に次元の話と関連付けると、一次元のバーコードは横方向の情報しか持ちませんが、二次元のバーコードだと縦方向にも情報を持つことが可能になります。

そのため、二次元のバーコードは一次元のバーコードよりも多くの情報を扱うことができます。実際には、二次元のバーコードは、一次元のバーコードよりも数十倍から数百倍の情報量を扱えます。

こうした次元の拡大と情報量の拡張との関係は、まさに思考の次元においても当てはまります。上記の例で言えば、「有能な奉仕者」という抽象的な言葉には、当然ながらメンバーを楽しませるといふ具体的な側面が含まれているでしょう。

しかし、逆に「メンバーを楽しませてくれる人」という言葉には、「有能な奉仕者」という言葉が内包している、「所属企業に対して貢献する者」「地域社会に貢献する者」「部下や上司に対して貢献する者」といった意味は含まれていないでしょう。

そのため、「有能な奉仕者」という言葉の方が「メンバーを楽しませる人」という言葉よりも情報が多く、抽象度合いが高いと言えます。そこから、「有能な奉仕者」という単語を駆使して意味を構築した人の方が、思考次元が高いという測定をしていくのが、フィッシャーをはじめとした、新ピアジェ派と呼ばれる多くの研究者が採用するアプローチです。

私が在籍していたマサチューセッツ州にあるLeciticaという組織が提供していた発達測定手法では、文章の論理構造のみならず、一つ一つの文に含まれる単語の抽象性も分析していました。その理由は、上記で述べてきたように、認知レベルと扱える情報量が密接に結びついているからです。

---

## 156. 認知レベルの発達とOSの進化

どこかの記事で、カート・フィッシャーが提唱するダイナミック・スキル理論における「スキル」とは、世間一般で言われているプレゼンテーションスキルや交渉スキルといった表面的なスキルではなく、それら表面的なスキルを発動させる深層的な認知能力のことである、と述べました。

そして、そうした深層的な認知能力は、コンピューターのOSのようなものであると指摘しました。私はコンピューターに関して門外漢なのですが、思い出せる範囲でいうと、例えば、WindowsのOSはこれまでWindows 95, 98, 2000, XP, Vista, 7, 8, 10とバージョンアップを図ってきました。

それらのバージョンを低い順に、フィッシャーのスキル尺度と対応させると(OS version= Skill Level)、95=5, 98=6, 2000=7, XP=8, Vista=9, 7=10, 8=11, 10=12 となります(フィッシャーのスキル理論では、レベル12を最大値として設定しているため、12から数字を下げていきました)。

単純に考えると、OSがバージョンアップされていくと、より高度なアプリケーションソフトを扱えるようになり、より高度なタスク処理ができるのではないのでしょうか。これと同じことが、人間の深層的な認知能力の拡張にも当てはまります。

フィッシャーの理論では、人間の認知レベルを0から12でラベリングしており、まさに認知レベルが上がっていくにつれて、より高度な思考を行うことができます。つまり、認知レベルが高まると、より高度なタスク処理を行うことが可能になります。

しかし、人間の認知に関して興味深いのは、私たちはバージョン10のOSを獲得したからといって、常にそのバージョンを基盤としてアプリケーションソフトを動かしているわけではないのです。さらに、私たちは発動させるアプリケーションソフトに応じてOSのバージョンが異なるということにも注意が必要です。

最初の点についてまず説明すると、問題発見能力に関して深層的な認知レベル12を獲得した人も、上司に叱責されて感情が揺さぶられている時や二日酔いの後では、本来発揮可能な認知レベル12のOSを駆動させて問題発見能力というアプリケーションソフトを活用することはできません。

---

さらに、私たちは置かれている文脈やタスクが異なれば、異なるOSのバージョンを発揮するという性質上、企業内で高度なOSを携えて問題発見能力を発揮していた人が、家庭内の夫婦関係に潜む簡単な問題すら発見できず、破局に至ることは頻繁に起こり得ます。

巷に溢れるビジネス書は、問題発見能力を開発すれば、それがさもどんな文脈においても同レベルで発揮可能であるかのような錯覚を与えますが、認知的発達心理学の枠組みからいうとそれは正しくありません。人間の知性や認知能力は、もっと動的なものですし、より変動的なものなのです。

二つ目の点に関して、発動させるアプリケーションソフトごとにOSのバージョンが違うということも、人間の認知という動的なシステムを理解する上で大切になります。例えば、普段は管理職として社内でリーダーシップスキルというアプリケーションソフトをバージョン10のレベルで駆動させていた人も、家に帰って赤ちゃんをなだめるというスキルはバージョン6のレベルしか発揮できないかもしれないということです。

要約すると、認知レベルが成長・発達するというのは、紛れもなくOSの進化のことを指しますが、OSが進化したらかといって、常にそのバージョンのレベルでOSを動かしているわけではないということが大切になります。

そして、活用するアプリケーションソフトの根幹には、固有のバージョンのOSが搭載されているという点も忘れてはなりません。これらの点を考慮すると、人間の認知というシステムは、実に複雑でダイナミックなものであるということを掴んでいただけないでしょうか。

#### 【追記:ダイナミック・システム理論活用による認知研究】

現在、私は人間の認知能力の複雑性を探求するために、応用数学の一分野ダイナミック・システム理論を学習しています。この理論を使えば、深層的な認知能力というOSが一秒単位で刻一刻とバージョンを変化させながら動いている様子が見て取れます。ここでは詳しく説明しませんが、人間の認知能力の成長・発達には、線形的かつ非線形的、静的かつ動的、普遍構造的かつ個別構造的な性質を持ちます。



---

## 157.ダイナミック・スキル理論をもとにしたLASとはどんな発達測定手法なのか？

世の中には知性発達理論に基づいた多様な測定手法が溢れています。例えば、スザンヌ・クック・グロイターのMAP (Mature Assessment for Professionals Profile)、ロバート・キーガンのSOI (Subject Object Interview)、ジェーン・ロヴィンジャーのWUSCT (Washington University Sentence Completion Test)、ビル・トバートのGLP (Global Leadership Profile)、オットー・ラスキーのCDF (Constructive Developmental Framework) などがあります。

これらのアセスメントは、すべて英語で提供されているため、日本人の私たちにはあまり馴染みがないかもしれませんが、欧米においては、このように成人以降の知性発達理論に基づいた多様なアセスメントが存在しているのです。

私が主に学習してきたのは、クック・グロイターのMAP、キーガンのSOI、ラスキーのCDFなどですが、ここ数年探求していた測定手法は、以前在籍していたマサチューセッツ州にあるLecticaと呼ばれる組織が提供しているLAS (Lexical Assessment System) と呼ばれるアセスメント手法です。

今後の記事では、LASというユニークな測定システムの全貌が明らかになるように、少しずつその中身を紹介していこうと思います。Lecticaの創設者セオ・ドーソンとハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーは、共同研究を度々行う間柄ということもあり、ドーソンが開発したLASの理論モデルは、フィッシャーのダイナミック・スキル理論の影響を強く受けています。

また、Lecticaの共同設立者であるザック・スタインは、ハーバード教育大学院の卒業生であり、なおかつケン・ウィルバーのインテグラル理論にも造詣が深く、インテグラル理論の観点からLASを解説している優れた論文がいくつか存在しています。

スタインは私にとってのメンター的な存在であるため、私の個人的な感情が混じっているかもしれませんが、スタインはハーバードに在籍する新進気鋭の教育哲学者・発達論者であり、彼の論文は洞察に溢れているものが多いです。

---

スタインが指摘しているように、LASは、私たちが持つ多様な知性領域を描写する「サイコグラフ」を作成するための、領域横断的な発達測定手法です。私自身がジョン・エフ・ケネディ大学でウィルバーのインテグラル理論を体系的に学んだという経験を踏まえ、スタインが試みたように、インテグラル理論の枠組みからLASを紹介していきたいと思います。

今後の記事では、大きな流れとして、発達理論と発達測定の歴史を概観した上で、LASの基本的な概念を紹介します。さらに、LASと他の測定手法を比較し、LASの妥当性に言及していく予定です。最後に、多様なサイコグラフを描くために、LASをどのように活用すればいいのかを示し、LASがもたらしてくれる恩恵は何なのかを省察します。

### 158. 発達理論の歴史と最新の発達測定手法LASについて

記事「157.ダイナミック・スキル理論をもとにしたLASとはどんな発達測定手法なのか？」の続き

知性発達理論の歴史を遡ると、およそ一世紀前、ジェームズ・マーク・ボールドウィンは、厳密な発達理論と統合理論を初めて提唱しました。それ以降、発達科学は進歩し、ボールドウィンからジャン・ピアジェ、ローレンス・コールバーグ、ロビー・ケース、カート・フィッシャーへと発達理論が受け継がれていきました。

上記の発達研究者以外にも、マイケル・コモنز、ロバート・キーガン、パスカル・レオンなどの新ピアジェ派と呼ばれる研究者は、発達科学の進展に重要な貢献をしてきました。認知的発達の研究は、実に長大な歳月をかけて行われているものであり、現在もその研究は進歩しています。

ここでは、こうした認知的発達研究の伝統を踏まえながら、最新の発達測定手法である「Lectical Assessment System (LAS)」という領域横断的な測定手法を紹介します。結論を先に述べると、LASは、アメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱した「発達の高度」という概念を体現するものであり、多様な知性領域を測定するための「共通の物差し」となりえます。

---

つまり、LASという一つの測定手法を適用することによって、多様な知性領域を測定することができるということです。これまでの発達測定手法は、一つの知性領域を対象とする領域特定型のアセスメントであり、一つの測定手法で複数の知性領域を測定することは不可能でした。

「LASを活用することによって多様な知性領域を測定できる」という主張は、一見すると大げさに聞こえるかもしれませんが、LASをインテグラル理論の枠組みで捉えると、その主張の根拠が明らかになってきます。

インテグラル理論で提唱されているほとんどの知性領域は、話し言葉や書き言葉によって表現できるものであり、LASはまさに、言語化可能なあらゆる発達領域を測定するための優れた「ものさし」なのです。ここで重要なことは、LASは「言語を媒介に表現された領域」だけを測定することができるということです。

要するに、LASは言語化できない知性領域を測定することはできない、という限界を内包していることを認識する必要があります。こうした限界を考慮に入れながら、LASがインテグラル理論の枠組みの中でどのように捉えられるかを議論していきます。

特に、これまでの発達測定の歴史を踏まえながら、「階層的複雑性」という発達の高度分析の鍵を握る概念について説明します。さらに、「LASは、領域横断的な共通の物差しを提供してくれると謳っているが、それでは領域固有な要素を無視してしまう危険性があるのではないか」という懸念事項についても言及します。

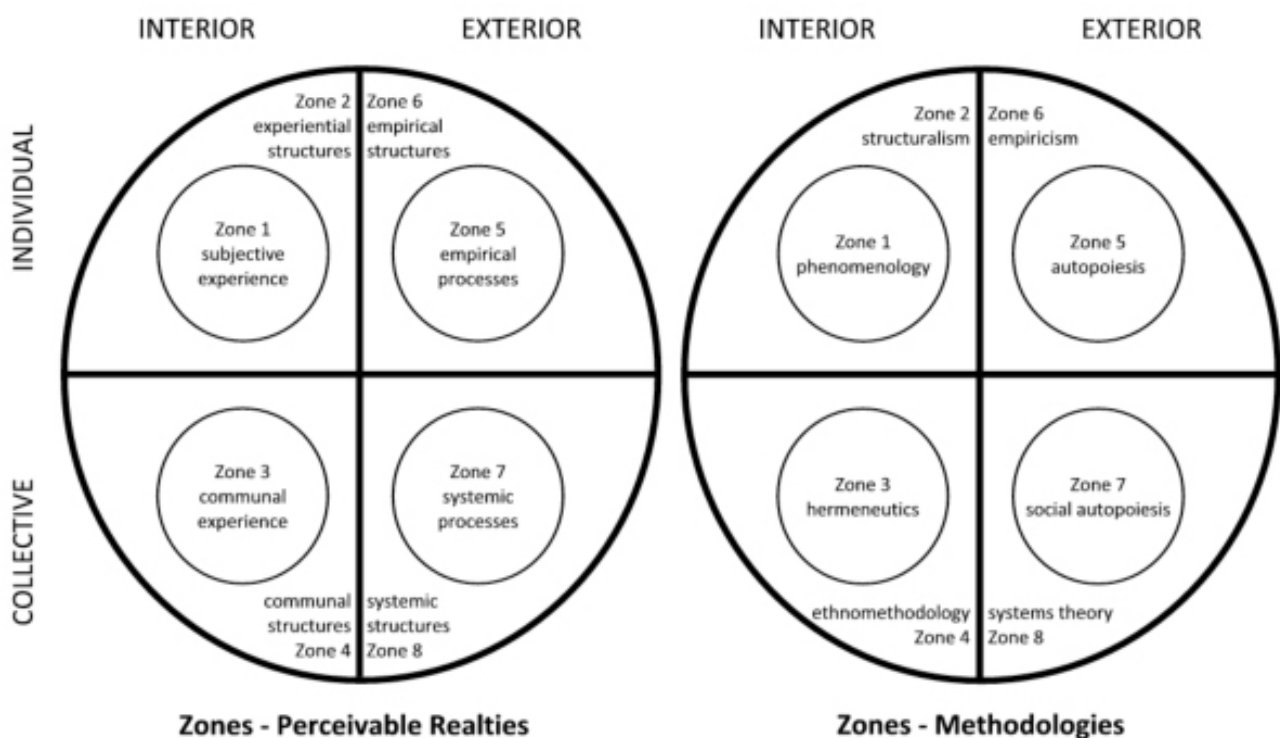
そうした理論的な説明をした後に、LASという発達測定手法を構成する様々な概念を紹介していきます。また、多様な発達測定手法を精査することによって、発達現象を測定する数多くのアプローチが存在することが明らかになってくるでしょう。

その中でも、LASは、発達現象を示唆する最も一般的な特性に焦点を当てている測定手法です。さらに、LASによって明らかになる発達レベルの特徴を紹介し、他の測定手法が明らかにしてくれる発達レベルとの関係性を説明します。

これから投稿していく記事の最後に、LASに関する調査結果をいくつか紹介します。第一に、他の測定手法と比較しながら、LASの妥当性に言及します。第二に、多様な能力ラインを測定するために、どのようにLASを活用することができるのかという「実用性」について紹介します。最後に、LASを活用する実践者にもたらしてくれる恩恵について紹介していきたいと思います。

### 159. 成人以降の知性発達理論をより深く理解するために: インテグラル理論と方法論的多元主義について

記事「158. 発達理論の歴史と最新の発達測定手法LASについて」の続き



これまでの記事を通じて、何度か「インテグラル理論」について言及をしてきました。知性発達理論を語る上で、インテグラル理論の枠組みを避けて通ることはできません。しかし、残念ながら、未だ当該理論は日本における成人以降の知性発達理論の言説空間において、共通言語としての役割を果たせてないのではないかと思います(というよりもむしろ、日本においてそもそも成人以降の知性発達理論の言説空間など、ほとんど生起していないというのが現状でしょう)。

私自身がジョン・エフ・ケネディ大学でインテグラル理論を体系的に学習してきたというバイアスもあるでしょうが、やはり、この理論の大枠と幾つかの重要概念を押さえていただけるだけで、知性発達

---

理論に対する理解が促進されると思っています。そのため、今回の記事は改めてインテグラル理論の大枠を説明します(インテグラル理論に関するより詳しい説明は「ジョン・エフ・ケネディ留学記」を参照していただければ幸いです)。

また、LAS(記事157および158参照)などの発達測定手法がインテグラル理論の枠組み上、どんな立ち位置にあるのかを把握していただくために、インテグラル理論の重要概念である「方法論的多元主義」についても言及していきます。

アメリカの偉大な哲学者であるウィルフリド・セラーズやチャールズ・パースは、哲学的な営みは「建築作業」のようなものであると述べています。つまり、哲学の目的は、ある命題に関する体系を構築することである、と言っても過言ではないでしょう。

特に科学の分野において、哲学は科学の体系化に大きく寄与してきました。現代哲学において、ケン・ウィルバーの業績は独自性があり、私たちはそれを見逃すことはできません。ウィルバーは、過去の哲学的な営みを踏まえ、学際的な調査と探求をもとに「インテグラル理論」という包括的なメタモデルを構築・提唱しました。

もちろん、こうした包括的な理論からこぼれ落ちてしまっている叡智が存在している、というのは否めないです。しかしながら、ウィルバーが提唱したメタモデルの完成度は非常に高いと言えます。特に、人間の意識という内面領域に対してインテグラル理論が果たした貢献は非常に大きいです。

それでは、どういった点でインテグラル理論が人間の意識発達という領域に貢献をしたのかをこれから見ていきます。インテグラル理論の概観は、「AQAL」という言葉に集約されます。AQALとは、すべての象限(All Quadrants)とすべての段階(All Levels)を意味します。

インテグラル理論の要諦は、メタ哲学的な立ち位置を取り、様々な領域の真実と洞察を可能な限り抱擁する枠組みを構築することにあります。こうしたメタフレームワークを構築するためには、高度に抽象的な一般化が要求されます。

---

そして、こうした一般化を行うためには、無数の方法論や発見事項を包摂・分類・区別することが要求されます。インテグラル理論がどのようにして、そうした一般化を行っているのかに関して、まずは「象限」という基本的な概念を見ていきましょう。

ウィルバーが提唱した「象限」という概念は、人間の知識領域に存在する最も一般的な分類を表します。アリストテレス、カント、ヘーゲルといった過去の偉大な哲学者たち、そして、パースやセラーズといった近現代の哲学者たちは皆、共通して、「知」を分類する枠組みを探求してきました。

言い換えると、それらの哲学者たちは、インテグラル理論で言うところの象限分類を行っていたのです。例えば、パースはカントの思想を受け継ぎながら、言語に内在する隠れた構造を解明していきました。パースは、「私(一人称)」「私たち(二人称)」「それ(三人称)」という言語の枠組みと概念分類が密接に関係していることを突き止めました。

この発見は、現代においてヨルゲン・ハーバーマスによってさらに探求が行われています。ハーバーマスは、それらの分類は「主観世界」「間主観世界」「客観世界」という、独自かつ互いに還元することができない三つの「世界の枠組み」が存在することを明示しています。

さらに、より詳細な言語学的な分析によって、人間の「知」に内包された普遍的な分類——「美(一人称)」「善(二人称)」「真(三人称)」、「芸術(一人称)」「道徳(二人称)」「科学(三人称)」、「自己(一人称)」「文化(二人称)」「自然(三人称)など——がこの世界に存在することを、私たちは改めて認識することができます。

ウィルバーはこうした普遍的な分類をさらに体系化し、「個人と集団の内面・外面」という四つの象限モデルを提唱しました。また、ウィルバーはそれら四つの視点を詳細に分析すると、「八つのゾーン」というより洗練された世界探求方法が存在すると指摘しています。

この八つのゾーンという分類は、「統合的な方法論としての多元主義(Integral Methodological Pluralism)」と呼ばれます。つまり、統合的な方法論としての多元主義を採用することによって、私たちは世界の多様な現象を互いに還元することができない八つのゾーンに分類し、それぞれ独自の方法によって探求することが可能になります。

---

八つのゾーンはそれぞれが独自の真実を開示してくれるため、互いに還元することができません。すなわち、ゾーン固有の真実を探求するためには、そのゾーンに合致した探求手法が必要になるということです。記事の冒頭にある写真は八つのゾーンを示し、各々のゾーンに対応した方法論は下記の通りです。

ゾーン1:左上象限:個人の内面領域の内側:現象学

ゾーン2:左上象限:個人の内面領域の外側:構造主義

ゾーン3:左下象限:集団の内面領域の内側:解釈学

ゾーン4:左下象限:集団の内面領域の外側:エスノメソドロジー

ゾーン5:右上象限:個人の外面領域の内側:オートポイエーシス(認知科学など)

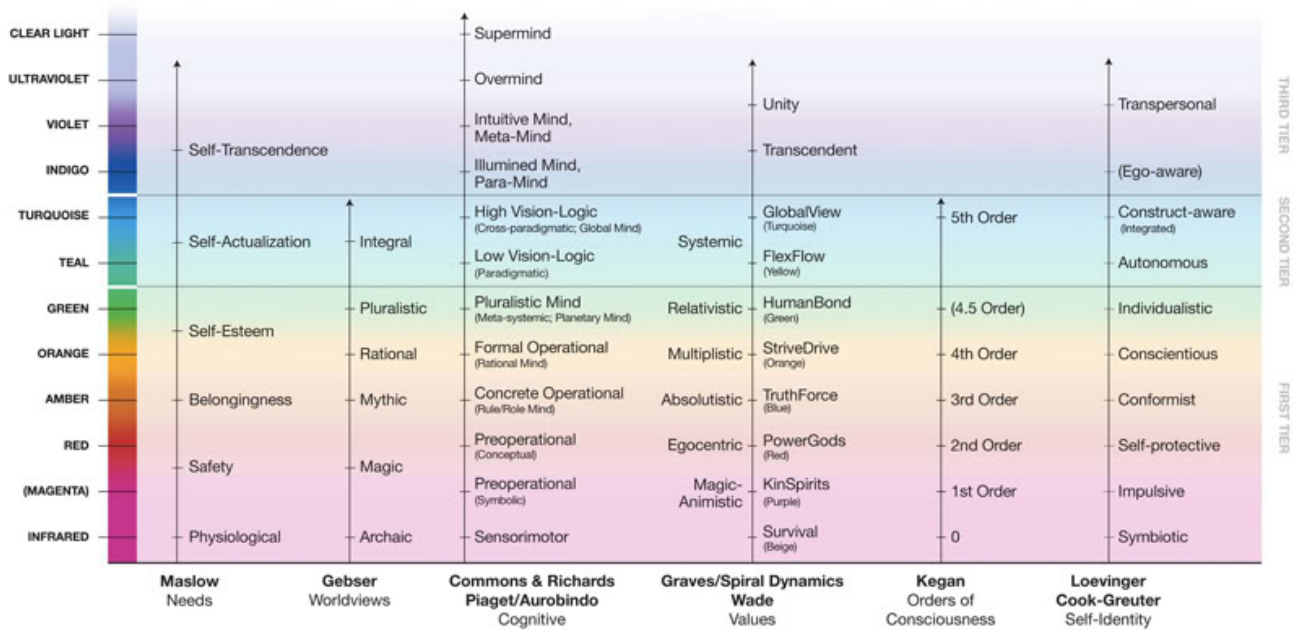
ゾーン6:右上象限:個人の外面領域の外側:経験論(神経生理学など)

ゾーン7:右下象限:集団の外面領域の内側:社会的オートポイエーシス

ゾーン8:右下象限:集団の外面領域の外側:システム理論

次回の記事以降で詳しく説明しますが、知性発達理論に基づく発達測定手法は、上記のゾーン2のアプローチに該当します。

## 160. 意識の特性と「サイコグラフ(psychograph)」について



「記事159.成人以降の知性発達理論をより深く理解するために:インテグラル理論と方法論的多元主義について」の続き

ここからようやく、インテグラル理論において人間の意識の発達を直接的に扱う領域「左上象限」について説明します。左上象限を見ていくことによって、どの発達測定手法にも共通する「意識の高度分析」というゾーン2の考え方に対する理解が深まるでしょう。

そして、ゾーン2の理解が深まることによって、LASというシステムの特徴をより適切に掴むことができると思います。ゾーン2の理解を深めるためには、まず人間の内面領域、つまり「意識」の特性に対する理解を深める必要があります。

意識の特性を分類すると、「タイプ」「状態」「ライン」「段階」に分けることが可能です。現在でもなお生き続けている「タイプ」に関する発見事項は、例えば、カール・ユングによる、内向型・外向型という分類です。タイプというのは、私たちの意識や行動が持つ安定的な特性であり、「性格類型」「男性性・女性性」などもタイプ分類の一つです。



---

「状態」という分類項目は、西欧の心理学研究において、長年にわたって探求されている領域です。例えば、アメリカの心理学を切り開いたウィリアム・ジェイムスは、瞑想などによって引き起こされる意識の状態変化を探求しました。

意識の状態は、感情や気分の変化、能力の変化と密接に関わります。ここで重要なのは、意識の状態は刻一刻と「変化」するものなのですが、意識状態の特性を語る際に、「発達」という概念を用いるのは不適切であるということです。

もちろん、瞑想の実践者は、様々な意識状態にアクセスできる能力を持っていますが、そうした状態変化は永続的なものではなく、一時的なものなのです。人間の意識発達を探求する際に、「タイプ」や「状態」を蔑ろにしないことは極めて重要です。

しかし、そうした状態は仮のものであり、永続的にその特性を保持できるわけではないのです。発達心理学の世界において、「発達」という言葉が当てられるのは、構造的な変化であり、それは一時的なものではなく、永続的なものなのです。その結果、意識の状態に対して「発達」という概念を適用するのは適切ではありません。そのため、ここでは発達という概念が適用される「ライン」と「段階」に焦点を当てていきます。

「ライン」というのは、私たちが持つ多様な能力の種類のことを指します。それら多様な能力ラインは、お互いに影響を与えながらも独立に存在しています。

多くの方は、ハーバード大学教育大学院のハワード・ガードナーが提唱した「多重知性」という概念を聞いたことがあるかもしれません。ガードナーの多重知性理論は、私たちが持つ多様な能力ラインの存在を明らかにしています。

ケン・ウィルバーは、ラインに関してさらなる調査・探求を行い、ガードナーの多重知性という概念を拡大し、「発達ライン」という概念を提唱しました。ウィルバーの調査によると、ラインは数十にも及ぶとされています。

---

ここで、道徳の問題に対して適用される推論能力と物理の問題に対して適用される推論能力の差を考えてみましょう。容易に想像できるように、そして実証研究が明らかにしているように、物理の問題に対して優れた推論能力を発揮する人は、必ずしも道徳的な問題に関する推論能力に優れているとは言えません。

つまり、物理の領域で要求される推論能力と道徳的な判断を行うための推論能力は、互いに異なる領域の能力であり、異なる発達過程を辿るということです。多様な発達ラインの存在を認めることによって、私たちは、人間が持つ異なる能力をより良く理解することができるでしょう。

これから見ていくように、発達心理学の伝統において、多様な能力ラインという考え方は大切であり、LASという発達測定手法の核となる概念でもあります。

発達ラインを研究することの難題は、各々のラインをどのように定義付けるか、発達ラインはどれくらいの数が存在し、それらはどのように相互作用しているのかを特定することです。この難題を克服することは難しいですが、カート・フィッシャーのスキル理論を用いれば、能力ラインの定義はより厳密なものになるでしょう。

ここで忘れてはならないのは、「段階」を理解することなしに、ラインを理解することはできないということです。段階は、各々のラインの発達を見定める道標(マイルストーン)のようなものです。

発達を見定める道標は、「意識段階」「意識レベル」「意識階層」というように、様々な名称で呼ばれることがあります。このように、意識の構造的な特性は、様々な名称で呼ばれますが、各ラインには固有の発達段階があり、その発達速度やプロセスが異なるという点を強調しておきます。

ウィルバーのインテグラルモデルでは、こうした多様な能力ラインを視覚的に捉えることができるように、「サイコグラフ」という概念を採用しています(記事冒頭の図を参照)。この図が示す縦軸(y軸)こそが、「発達の高度」を表しており、それは今後の記事で取り上げる主要なテーマとなります。